

口述研究発表

指定テーマ「コロナ禍における医療提供体制の変化と課題」

【セッション1】(10:10~11:10)

座長 藤井雅代(日本診療放射線技師会 理事)

1. 当院における COVID-19 患者への放射線検査の対応方法と問題点について

苫小牧市立病院 医療技術部放射線技術科 大島 貴仁

<発表要旨>

当院は北海道の苫小牧市にある第2種感染症指定医療機関であり、2020年2月から新型コロナウイルス感染症の患者の受け入れを行っている。当科としてはコロナ対応患者にポータブルX線検査とCT検査を実施している。2020年10月以降から苫小牧市内でクラスターが発生し、患者数増加に伴い放射線検査の件数も増加した。増加していく検査の運用の中で、苦労した点・課題点が見つかったので、今回当科としての取組みと課題について紹介する。

2. 新型コロナウイルスに対する CT 検査での感染対策

亀田総合病院 画像診断室 石井 哲也

<発表要旨>

CT検査を行う上で患者が入室前の準備が大事になる。寝台の上の余計なものは無いように取り除く。寝台の固定ベルトはマジックテープ式になっており容易に掃除することが困難なため外す。独歩可能で従命のきく患者は寝台からの転落の可能性はないと考え、感染拡大防止のために患者入室前に外し患者入室させ検査施行する。患者に接する役割と接しない役割に分かれ2人体制で検査を施行することが望ましい。

3. 当院の発熱外来における X 線検査の現状と課題について

大垣市民病院 医療技術部 診療検査科 梅本 伸

<発表要旨>

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大により、医療現場にも大きな変化がもたらされている。

当院は岐阜県西部の西濃圏域医療圏の中核的基幹病院であり、第二種感染症病棟を保有している。院内感染防止のため、COVID-19が疑われる症状のある患者の診療はすべて救急外来に設けられた発熱外来にて対応し、診療放射線技師はチーム医療の一員としてX線撮影とCT検査を担当している。当院での取組みおよび現状と課題について報告する。

4. 新型コロナウイルス感染症に対する診療放射線技師の取組み

昭和大学大学院 保健医療学研究科 安田 光慶

<発表要旨>

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、昭和大学病院では発熱外来で診療を行うため、病院建物外に簡易テントおよびプレハブの設営を行った。発熱外来では、胸部エックス線検査を実施することとなり、設備面や院内感染対策について、多職種によるチームで対応を行った。今回はその取組みについて報告を行う。

5. 新型コロナウイルスに対する放射線技術部の取組み

—救命X線CT検査室と血管撮影室—

昭和大学 藤が丘病院 大澤 三和

＜発表要旨＞

当院は、救急医療センター専用の X 線 CT 装置が設置されており、新型コロナウイルス陽性・疑い患者が救急搬送された場合、救急車からダイレクトに CT 検査を施行し、感染拡大防止に努めている。また、血管撮影室は 3 室あるが、周囲の環境（患者の動線など）を考慮し、平日と夜間・休日の使用検査室を分けている。今回は当院での救急医療センターや血管撮影室における検査の実態や急変対応、他職種との協力体制等の運用について報告する。

6. Covid19 患者を想定した CT 室内散乱線測定と感染予防策の検討

埼玉県済生会川口総合病院 富田 博信

＜発表要旨＞

当院は新型コロナウイルス感染症の重点医療機関であり、2020 年当科でも、多くの対応をすることになった。今まで診療放射線技師の CT 撮影において、今回のように嚴重な感染対策を講じた経験は無く、新たな試みであった。当初より PPE は枯渇し、装脱着、など院内感染対策チームと検討しマニュアル化を行った。また、ゾーニングによる汚染 CT 室内介助者退避の最適位置を検討するため、CT 室内の空間線量測定を行ったので報告する。

【セッション 2】(11:10~12:10)

座長 吉井智晴（チーム医療推進協議会 理事）

7. 当院におけるコロナ禍での多職種連携強化 — 技師として変化した業務内容 —

新小山市市民病院 医療技術部 放射線部門 渡邊 城大

＜発表要旨＞

コロナの影響により業務の変化が余儀なくされている。当院でも例外ではなく、診療放射線技師はフェイスシールド・マスク・手袋・防護衣を着用し、増加した一般撮影および CT 検査に対応している。一方、病院全体としては、建物内への来院の管理が求められている。マンパワー不足になりがちな部分に、放射線業務のみでなく関与する必要があり、多職種が積極的参加を行っている現状を報告する。

8. 東京医科歯科大学におけるコロナ外来診療センターでの取り組み

～COVID-19 専用 CT 検査室の導入に関して～

東京医科歯科大学医学部附属病院 羽田 絢人

＜発表要旨＞

COVID-19 ウィルスが全世界で蔓延し、我が国でも初めて感染者が確認された 2020 年 1 月 16 日以降、東京医科歯科大学（以下本学）では数多くの COVID-19 患者を受け入れてきた。本学では COVID-19 専用病棟への改築・増床と並行し、屋外（大学敷地内）に専用 CT 装置を備え付けたコロナ外来診療センターが開設されることとなった。本発表では医師・看護師・放射線技師等の協力のもと運用されている、感染対策を施した COVID-19 専用 CT 装置の導入について報告する。

9. 放射線治療部門における新型コロナウイルス感染対策と情報共有

～日本診療放射線技師会 放射線治療分科会の取り組みから～

多根総合病院 川守田 龍

＜発表要旨＞

2020 年 4 月に第一波として感染が拡大した。この時期ウィルスの特徴がまだ明確でなく様々な感染対策がされている状況下で各施設手探り状態であった。放射線治療特有の業務の流れから治療部内で感染を拡大させないため、各施設が実施している対策を情

報共有するための仕組みが必要だと考え、技師会放射線治療分科会ではアンケート形式にて情報収集し、その記載内容をリアルタイムで情報共有できる仕組みを作ったので報告する。

10. 総合患者支援センターの一元化による新型コロナウイルス感染症入院一時保護委託の取り組み報告

公益財団法人東京都保健医療公社豊島病院 砂原 聡子

＜発表要旨＞

当院は第二種感染症指定医療機関として、保健所等からの要請により、家庭内感染等の親子を感染症内科および小児科で入院を受け入れている。

その中で子が陰性であっても家庭で過ごすことができない場合は、児童相談所と連携して入院一時保護委託として令和2年度内では32名の児童を受け入れした。

総合患者支援センターとして看護事務部門と入退院調整を一元化したことにより、新規運用を円滑に進めることができた経過を報告する。

11. コロナ禍におけるソーシャルワーク

社会医療法人 恵和会 西岡病院 岡村 紀宏

＜発表要旨＞

コロナ禍における医療ソーシャルワーク業務への影響調査を行った。医療ソーシャルワーカーは対面面接での業務を軸としていたが、その対面面接が十分に行えないことへの影響が示唆された。今後 ICT の活用など対面ではない方法での連携やご家族への支援方法の在り方が必要になってくる。すでに行っている ICT での地域連携や介護施設におけるクラスターにおける ICT の活用などの実例をあげて、新たな連携方法について報告を行う。

12. 2次救急医療機関が断らない救急を続けるための感染対策と ER における実践報告

埼玉石心会病院 須賀 万里

＜発表要旨＞

埼玉石心会病院は2次救急医療機関として、コロナ禍となった2020年に、年間8,400名以上の救急搬送患者を受け入れた。

平時の救急医療とは違い、感染症の症状を有していない患者についても、接触歴などを積極的に聴取し、感染対策を強化した。

当院建物に入館する際に実施する感染対策用の問診票の導入、ER内のエリア分けとPPE追加、ルール変更時のスタッフへの情報共有などについて、その取り組みを報告する。

【セッション3】(12:10~13:00)

座長 小林 毅 (チーム医療推進協議会 理事)

13. 新型コロナウイルス感染症による作業療法士の業務と生活への影響について
～会員調査の結果を通じて～

日本作業療法士協会 遠藤 千冬

＜発表要旨＞

日本作業療法士協会では新型コロナウイルス感染症に関して、会員の業務と生活への影響を2020年4月、2020年10月の2回調査を行い、その把握に努めた。また12月には逼迫する医療提供体制に対し、特に新型コロナウイルス感染症の専用病床において作業療法士がどのような寄与ができるのか、病棟支援等の状況を調査した。それらの調査結果を報告し、コロナ禍の医療機関における作業療法提供の課題について考察する。

14. 当院における COVID-19 禍での心臓リハビリテーションの対応

群馬県立心臓血管センター 生須 義久

＜発表要旨＞

当院では国の緊急事態宣言や群馬県の警戒度に応じ、外来心臓リハビリテーションの休止期間を設けた。この休止期間には多職種で協力して作成した運動や食事、ストレスマネジメントなど自己管理のためのビデオ配信やパンフレットの送付に加え、電話での体調確認などを実施した。

また、休止中に体調に関するアンケートを実施したところ抑うつ、不安の有病率は先行研究よりも低値であり、休止以前と有意な差は認めなかった。

15. COVID-19 患者へのリハビリテーション治療の提供に向けて

埼玉医科大学総合医療センター 國友 淳子

＜発表要旨＞

当院は感染症指定医療機関ではないため、当初は PCR 検査で陽性となった COVID-19 患者（以下陽性患者）の受け入れは行っていなかった。しかし、2020 年 4 月より陽性患者の受け入れが開始となり、その 1 ヶ月後にはリハビリテーション（以下リハ）治療依頼が出た。リハ部では担当医・感染制御室などと相談し、陽性患者のリハ介入の基準・手順等を定めた。今回、陽性患者へのリハ部の対応について、介入の結果と若干の考察を加えて報告する。

16. 当院リハビリテーション療法室における新型コロナウイルス（COVID-19）への対応と現状報告

松下記念病院 診療技術部 リハビリテーション療法室 熊野 宏治

＜発表要旨＞

【はじめに】新型コロナウイルス(COVID-19)の影響による当院の現状を報告する。

【COVID-19 への対応】

(1)スタッフのゾーニング (2)病棟チーム制の導入,訓練時の感染対策 (3)訓練室のレイアウト変更,換気と消毒の実施 (4)会議,研修会への参加方法の検討

【結果と考察】稼働率が前年比 11.6%減少したが、チーム制の導入や業務の効率化により取得単位数は維持,残業時間は 735.8 時間減少した。

17. 当院におけるコロナ禍での急性期言語聴覚療法提供体制の変化と対応

医療法人社団苑田会 苑田第一病院 遠藤 貴之

＜発表要旨＞

当院は、年間約 700 件の脳卒中患者のリハビリテーション処方が出される急性期病院であり、言語聴覚療法の依頼の多くは摂食嚥下評価・訓練となっている。しかし、現在のコロナ禍において摂食嚥下評価・訓練は飛沫感染やエアロゾルの問題といった側面があり、関連学会から介入の為の提言も公開されている。当院における、摂食嚥下評価・訓練時の介入方法やスタッフ教育の取り組みといった言語聴覚療法提供体制の変化と対応を報告する。